



# 明日を拓く、 シンエツの知恵。

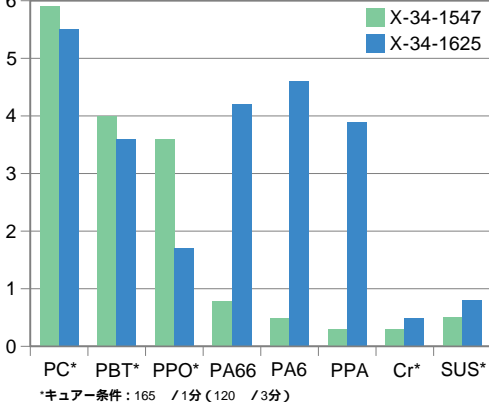
## シンエツの先進テクノロジーを探る

### Chapter 2

### LIVE REPORT 担当者インタビュー

信越グループが誇る先進の製品にはどのような技術、そして知恵が詰まっているのだろうか。各担当者の話を通じて信越製品の魅力に迫る。

MPa インサート成形による剪断接着力



X-34-1547...PC、PBTに対し、選択接着性を持つタイプ  
X-34-1625...ポリアミド樹脂に対し、選択接着性を持つタイプ

PC...ポリカーボネート  
PBT...ポリブチレンテレフタレート  
PPO...ポリフェニレンオキシド  
PA66...ナイロン66 (ポリアミド樹脂)  
PA6...ナイロン6 (ポリアミド樹脂)  
PPA...ポリフタルアミド (ポリアミド樹脂)  
Cr...クロム  
SUS...ステンレス

### メーカーとの連携で 新たな用途を切り拓く

自信はないが、  
使命感に突き動かされた



シリコン電子材料技術研究所 第二部開発室  
畔地 秀一

ノンプライマーで一体成形を実現

## 選択接着性 液状シリコンゴム

市場の期待に応じて信越化学が開発した、ポリアミド樹脂対応の選択接着性液状シリコンゴム。この新材料開発までの道のりは決して平坦ではなかった。難度が高い技術研究テーマに対して研究者はどう取り組んだのか。また、新材料の用途は今後どれだけ拡大していくのか。開発を担当した畔地さんにお話をうかがった。

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

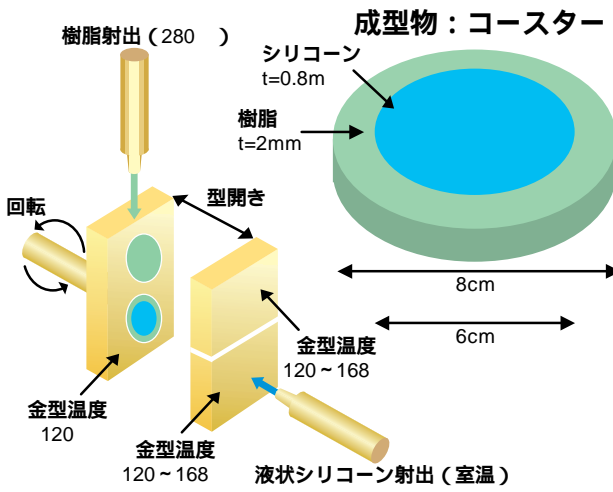
しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。

「鍵を握るメーカーとのパートナーシップ」

90年代後半から、自動車関連部品や電気・

「ポリアミド樹脂は、PCやPBTとは全く違う分子構造を持っています。したがって、同じ発想は通用しません。この方向で進めれば良いという指針がまったくない状態でのスタートだったのです。」

しかし、営業サイドからの要望は強かった。1970年代から選択接着性液状シリコンゴムの開発を進めてきた信越化学にとって、絶対に他社の先行を許したくない技術分野。しかも、ポリアミド樹脂は数あるエンジニアリングプラスチックの中で最も生産量が多い。これに対応した選択接着材料の開発は、液状シリコンゴム全般の営業戦略にも影響する。まさに本命と言える研究テーマだったのである。成功の自信はなかった畔地さんだったが、やらなければいけないという使命感はひしひしと感じていた。



樹脂と液状シリコン材料を金型に流し込み、約30秒で一体成形による2色コースターが完成する



2色成形機により成形されたコースター